

王子は、「いや、これは便利な男がいたものだ。」と、すっかり感心して、「これからわたくしのおともになってくれないか。」と言いました。「へいへい、それは、ねがってもない幸いでございます。」と、ぼうは大喜びで、すぐに家来になりました。王子は二人を連れて、またどんどん行きました。そして間もなく、ある大きな森の中へ来ました。するとそこに、だれだか一人の男がいて、くぬぎの大きな木をかたっぱしから引きぬいては、どんどん積み上げて

いました。王子は、「もしもしそれを積み上げてどうするのです。」と聞きました。するとその男は、「なぁに、ただ目から火をふいて、この丸太を一どきに燃やすんです。」と言いながら、じっと目をすえて、その山のように積み重ねた木をにらみつけました。すると、両方の目の中から、シューシューと、長いほのおがふき出て、それだけの丸太をまたたく間にはいにしえてしまいました。「ほほう、これはすばらしい。どうです。わたくしのおともになりませんか